埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

# <Report> Action Management and Trauma Understanding as the Method of the Finding Employment Support: a Case Study of a Junior College Student


| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2019-03-11<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 丹羽, 健太郎, NIWA, Kentaro<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1214 |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

# 保育者養成校において就職活動停滞後に不安の理解と行動目標の管理によって就職へと至った短大生の事例

丹　羽　健太郎

## Ⅰ．はじめに

発達的な視点からみる時，「就職」は，ライフイベントと言える。ライフイベントというのは，人生における大きな生活上の出来事であり，青年期においては情動発達に影響しているとも言われている（内山，2016）。就職に直面した学生は，情緒的な揺さぶりを受けやすく，学生から社会人へと変化する過程において自分の内にある指向性・持っている能力・価値観といったものを再確認しながら就職先を選択していく。保育者養成の現場に立つと，就職の時期に情緒的に不安定になる学生もおり，学生の内面が大きく揺さぶられているように思われる。そして，ほとんどの学生は，そうした状態に耐えながら就職活動を進めていき，終了により安定を取り戻すと共に幾許かの成長をみるように思える。しかし，時にライフイベントをきっかけとする揺さぶりは，様々な個人要因と影響し合い学生本人も想像しないほどの影響を与え，行動を止めてしまうことすらある。学生の発達を保証するという立場に立つならば，そこに支援ニーズが顕在化したと捉えることもできる。保育者養成校は，保育者を養成する場であると共に学生自らが発達する場でもある。であるならば，こうしたニーズの中身を知り支援方法を検討して蓄積することは，意味があると考えられる。

本事例は，就職活動を始められなかった学生が，個別面談を重ねることで就職に至ったケースである。就職２年経過後に学生より有効であった支援内容について主観的評価を受けることができた。学生個々への就職活動を支援するために必要な視点を考える一助としたい。

本事例の報告にあたっては，本人に説明し同意を得た。尚，研究倫理の観点から事例の細部は意図的に変更した。

## Ⅱ．事例概要

事例：A　保育者養成校（短期大学）2 年生。女性。

### 1. 主　訴

就職活動ができずに困っている。

### 2. 普段の様子と進路希望

授業は常に後ろの座席で聴いていたが，授業態度は良好で成績も良かった。学科内に仲の良い友人関係を持ち，学生の自治活動にも参加していた。資格取得に向けた単位取得も順調であった。就職先としては保育所を希望していた。

### 3. 家族構成

母；会社員，姉；会社員，妹；中学 2 年生。父；別居して 3 年目，癌治療のため入院していたが面接直前に退院，A は物品を届ける等の関わりをしていた。

### 4. 主訴の経緯

A が幼児だった頃の保育者への憧れと妹との関わりから A は保育士を目指して短大に入学した。短大へは，「早く子どもと関わりたかった」と「意気込んで入った」が，いざ就職活動が始まる 9 月頃になると自分が働く姿が「全然想像できな」くなった。10 月は学園祭の活動に没頭し，11 月に改めて開始しようとしたが動けなかった。

### 5. 相談に至った経緯

保育者養成校の学生の多くは，9 月から 11 月頃にかけて就職先を決めていくが，A は 12 月半ばになっても就職活動を開始できていなかった。心配した A の友人が筆者である教員に相談したことで教員が知るところとなった。X 年 12 月 17 日，友人の就職相談に同伴する形で A は教員を訪問した。その際に教員から A に面談を勧めたところ A も希望して個別面談へと繋がった。一連の段取りは A の友人によるものだった。この時点まで，A は家族も含めて誰にも就職についての相談をしていなかった。

## Ⅲ．面談経過

### 1. 初回面接（X 年 12 月 22 日）

#### 1)　就職活動が停滞していることについて A から語られたこと

A は就職活動の停滞について「自分がどうしていいかわからない。」と訴えた。保育所で働くことに対しては，「子どもと一緒にいることは OK。大人と一緒にいることは何話していいかわかんない。関わり方がわかんない。」と話し，「実習先で，先生でも塊ができてる，聴きたいことあってもきけない。どう話していいかもわかんない。悪口言ってるのも聞こえちゃうからやだな。言われたりするのも嫌だ。だったら関わんなくていいや。」と実習での体験とその時の思いを説明した。またそうした先生に対して「嫌われたくない。」「関わらなくてはいけない人たちでもない」と考えているとのことだった。A にとっての“子ども”は小学校低学年くらいまでのことを示しており，それよりも年上の子どもは怖いとのことだった。

「就職はできたらしたい」と考えており，その理由としては「家計を助けていきたい」とのことだった。その背景には，妹に対して経済的な事情を理由に進学をあきらめてほしくないという考えがあった。しかし，自分が働いている姿を想像することや就職活動を考えることができないとのことで，「今は働くことに対して難しいかなって思う。」と自身の状態を語った。

#### 2)　就職活動の停滞に対する家族の反応（1）

A はこうした気持ちを母や姉に話してはいなかった。姉からは就職活動を始めるよう促されているとのことだった。母は妹が大学卒業するまでは 3 人で面倒をみようとは言うが，それ以上何か言うことはなかったとのことだった。

#### 3)　対人関係にみられる逆境的体験と保護的な体験（1）

主訴についての A の語りからは，A が対人的な不安を抱えていることが推察された。そのため，過去の対人関係に関する体験を評価したところ複数のエピソードが存在した。

A の父親は小 2～中 3 秋まで単身赴任をしていた。父親からは時折電話があり，その度に母親は電話口で怒鳴られ，A はそれを横で聞いていた。A は「ママ寝られなかったと思う。」と話す。父親の怒り方は予測不能で不条理だった。その影響として，A は「大きい音が急にするとびっくりする時がある。駅でおじさんが怒鳴ってると，わーってなる。すぐに離れる。」と話した。

小学 2 年生の時にいじめにより不登校になった。この時はたまに学校に行っていた。小学 5 年生の時は全く登校しなかった。中学 2 年生の時は，クラスの生徒から A の態度が普通ではない

と言われ，A がＢ（A の同級生）をいじめてると言われる。B は保健室に通うようになっていた。A としては普通の態度をとっていたと思っていたとのことだったが，この件で登校しづらくなり 3 ヶ月ほど断続的な欠席が続いた。再登校のきっかけはスキー教室への参加であった。その際，B は問題なく学校生活を送っており，A は「なんなんだったんだろう」と思ったとのこと。A が学校を欠席している間，母が A を連れ出して相手になり，姉が妹の育児をするといった家族による支えがあった。

A にとって一番楽しいと感じる時間は，高校から続いている友人 C と遊んでいるときだとのことだった。A は C について「いるだけでいい。面白い。」と思っており，家族のような存在だとのことだった。C は大学に行くために働いており，「今は仕事が楽しくなってきた。」と話しているとのことで，A の就職への姿勢に影響を与えていた。

#### 4） 面談者の姿勢とフィードバック

初回面談であったため，A の主訴である就職活動の停滞と関連している要因のアセスメントを行った。生育歴における対人関係についてのイベントは，主に面談者からの質問への返答として引き出された。面談者からは，就職活動を止めている要因として就職後の対人関係への不安があるようだと返した。また，A が家庭で体験した出来事に「虐待」という名前を付けて返し，A の対人関係における不安感はそうした被虐待体験の影響だと考えることができると説明した。

### 2. 第 2 回面談（X 年 1 月 15 日）

#### 1） 就職に対する A の気持ちの変化と周囲の反応

A は，就職活動の時期が遅くなってしまったことと，「絶対人間関係でつぶれる」ことから通常の幼稚園への就職は難しいと考え，小規模の託児所やベビーシッターを考えているようだった。さらに，そうした就職の方向性を家族に話しをしたとのことだった。

人間関係に対する不安に対して，姉からは「誰でもある」と言われたとのことで，A としては「そんなんわかってるよって感じなんだけど」，でも「なんか，うまくやっていける自信がない。」と考えていた。A としては，姉・母や短大の友人といった人たちに就職に対する自分の不安が伝わらないのだと話している。家族に理解して欲しいのかと面談者が尋ねると，「よくわかんない。」と答え，「今は誰もわかってくれないかも。」と話していた。

一方で，「これから話すとしたら，一番仲いい友達かな。」と C のことをあげ，「焦んなくてもいいんじゃない。すぐ就職じゃなくてもいいよって言ってくれる。自分のやりたいようにやったらいいって言ってくれる。」と，その理由を話していた。

**2)　行動支援の開始**

A は，自身の適性にあった就職形態を考え出していることから面談者から具体的な行動目標を示して進めていくこと（宿題）を提案した。A の承諾が得られたため，A の意見を取り入れながら次回までの行動目標を共同で立てた。

**3)　漠然とした不安感の自覚**

行動目標を立てた後，A からは「どれに困ってるのかわからない。何がつらいのか，つらくないのかわかんなくなってきた。」との訴えがあった。面談者からそうした感情がいつ頃からあるのか尋ねたところ，高校 2 年の頃だと言い，初回面談では聞かれなかった高校時代の体験が語られた。

**4)　対人関係にみられる逆境的体験と保護的な体験（2）**

高校 2 年生の時，進路希望先として保育に関する学校に行きたいと書いたところ，教諭から「私だったら A のいる保育園に子ども預けられない」と言われる。A が信頼していた教諭だったことから，大きなショックを受けて大泣きしながら帰宅したとのこと。後日教諭より謝罪を受けるが，A は「ホントは謝る気ないだろって思って，2，3（年）担任だったけど話してない。」と話す。

**3. 第 3～6 回面談（X 年 1 月 22 日～2 月 8 日）**

**1)　行動支援**

第 3 回面談において，A は就職先の候補として 3 件の求人票を確認し宿題を達成してきた。3 件ともグループ運営をしている保育所で自宅から近い距離にある園だった。

面談者より 3 つの園に希望順位をつけるよう促された A は，家庭的であるという説明書きのあった X 保育所を 1 位とした。次のステップとして，見学を実施するために連絡の取り方や実際に見学に行くときの注意事項について話し合った。連絡の取り方では，電話を掛けた時に質問する内容をひとつずつ確認した。質問内容は，A が心配していることを中心にあげ，就職のために保育所を見学する際の一般的な注意事項を面談者が確認した。宿題は，1 月中に X 保育所と連絡を取ることとした。

しかし，第 4 回面談では宿題は達成されていなかった。A は，「連絡を取ろうとしていたけれども，テストや他のことがあり，気づいたら日にちが経っていた。」と話した。面談者がどのような気持ちであったのか問うと「『今更感』があるような気がした。」と話した。『今更感』というのは，時期が遅れてしまったために「断られるんじゃないかな」という不安，「なんでもっと

早くやっとかなかったんだろう」という「ショック」，また採用されなかった場合に早く就職活動を始めなかったことを後悔するのではないかという気持ちと次の候補も断られるのではないかと思って次に進めないかもしれないという心配とのことだった。

面談者は改めて「就職すること」という目標をAに示した。その上で，X保育所に採用されなかった場面をイメージしてもらった。どんな気持ちになるか尋ねると「自分が1月中にやるっていったのに，やれなかった。もういいや。なにやってんだろって感じ。自分にあきれた。」と話し，感情としては，怒りだと話す。そこで，他の人が同じ状況になっていたらAはどのように対応するかと尋ねると，「他の人にだったら，断られたりしたときの対応をいってあげたりするかもしれない。『そんなことないよー』って言うかもしれない。」と考えることができた。最後にA自身に対する苛立ちやもやもやした感情をなくすにはどうしたらいいのかと尋ねると，「やるしかないって感じ。」と答えた。面談者は，Aが行動を進めていけるようにこれまでに達成できたことと今後の目標をスモールステップで示し，見通しを与えた。

第5回面談では，宿題は達成され，AからX保育所に電話を掛けられたと報告があった。Aは，あまりに呆気なく話しが進んだことに拍子抜けしたような様子だった。

第6回面談では，履歴書を送り，就職面接を受ける予定が立ったことが報告されたが，履歴書を記載する際に「手が震えて書けなかった。」とのことだった。

#### 2) 就職活動の停滞に対する家族の反応（2）

手が震えて履歴書が書けないAに対して，母親は「やめてもいいよ。」と伝えた。母親が姉に対しては辛くとも頑張るように言っている姿をAは見ており，「自分にもそう言われると思っていたため驚いた」とのことだった。また，就職したら少なくとも1年は続けなければいけないと考え，そのためにAは恐怖を感じていたとのことだった。

Aが感じていた恐怖は，実習に参加した際に教職員が陰で悪口を言う姿や子どもの前で親の悪口を言う姿を目にし，そうした職員と嫌でも関わらなければいけないのだという思いが原因であるとのことだった。

### 4. 第7～9回面談（X年2月15日～3月24日）

Aは3月11日に就職を決めた。Aの就職活動が軌道に乗ったため，面談者は就職後の問題を予防する方向へ主題を移した。主に過去体験の語りと意味付け・リラクゼーション法の学習・現在の対人的な不安に対する過去の逆境的体験との関連についてAが理解し実践できるように練習をする面談を行った。

過去体験の語りの中で，Aは，父親から橋の下で拾ってきた子で本当の子ではないと何度も

言われたきた経験を語った。まだ幼かったAは本気で受け止め大泣きしていたとのことだった。母と姉が否定し続けることでようやく落ち着いていった。そうした発言をする時の父親は笑っていたとのことで，Aは父親に対して「Aが泣いてるのを楽しんでるみたいな。人がそういう風に苦しんでるのとかそういうので元気になってるんじゃないかなって思ってる。」と受け止めていた。

## Ⅳ．就職後2年経過時点から見た面談内容の評価

就職後2年が経過した際に，Aに面談の経験を振り返ってもらった。振り返りの前に，研究として使用する旨を伝え同意を得た。聴き取りは筆者の研究室で実施した。また，同意を得た上でICレコーダーに記録し逐語録を作成した。

### 1. 就労後の状況

初めの就労先では良い人間関係に恵まれたとのことだった。懸念された職場内での対人関係に躓きはなく，会議の中でも積極的に発言するなど良好な適応を示した。しかし，3ヶ月の間に所長が複数回替わるなど運営状態が適切とは言い難く，悩んだ末にAは翌年に転職していた。転職後の職場では，「また何か私も地味な感じに過ごしてます。お化けみたいな感じ。」と話し，まだ適応していない様子だった。就労が継続されている理由は子どもたちがかわいいからということだった。転職後も初めの就労先で知り合った保護者・職員との付き合いが続いている。転職後の就労は継続されていた。

### 2. 面談内容に対する主観的評価

面談において就職を後押しした要因を尋ねたところ，「話していく中で，自分が分かってなかった部分，自分が辛かった部分，こうだったから辛かったんだなとか，そういうのが分かってもらえたよね。」「自分がつらいっていう状態は感じてたけども，それがどうしてそうなるかが分からなくって，その理由が分かったことが良かったってこと。」とのことだった。

行動支援が就職を後押ししたか尋ねたところ，「あれはでも期限が決められてるからやらなきゃって，たぶん思って動いてたから。でもたぶんそれがなかったら何もやってなかったから，それはあって良かったなって思う。」「しんどかったけど，でも，やんなきゃいけないのは分かってるけどやってなかったから，そのつけが回ってきたっていうか，そんな感じ。」とのことだった。

リラクゼーションの効果について尋ねたところ，「そのつらいっていうときに，たぶん，それ

を思い出さないっていうか。…そのことで頭がいっぱいになっちゃうから，あんまり。気づいたときとかにはやってみるけどって感じかな。」とのことであった。

## Ⅴ．考　察

### 1. A の不安感

就職活動を停滞させていたのは A の内面に生じた不安感であったと推察される。初回面談では就職活動をどのように進めていけばいいかわからないという具体性を持った訴えであったが，不安感は具体的な対象を持っておらず質的に異なる訴えであったと考えられる。恐らく，A はどこからくるのかわからない不安感情が自分の内に在ることを自覚したのだろう。そしてそうした感情が高校 2 年生の頃からあるのではないかという A の発言は，その不安感情が就職に関する辛さや困り感とは別のものであることを面談者側に理解させる。

A の言動からこの不安感情を理解することを試みる。高校 2 年生の頃の教諭による発言で A は強いショックを受けている。確かにショックを受けることは十分に考えられる一方で，それまで仲が良く信頼を寄せていた教諭の発言意図を汲もうとはしないだろうか。事実，面談の時には教諭の意図を肯定的に理解することもできていた。その後，担任である教諭を無視するような状態で 2 年間を過ごしている。これはショックからくる怒りというよりも，人から否定されることに対する過敏さを元々持っており，教諭から再度否定されないよう回避していたと考えられないだろうか。では，人から否定されることに対する過敏さはどこからくるのであろうか，これは幼児期から学童前期に体験した父親からの存在の否定とそれに伴って生じた深い悲しみ，また父親による母親に対する激しい叱責を見聞きした体験にあると考えられる。母親が叱責されたときの A の感情は語られていないが，幼い子どもが目の前で母親が怒鳴られている様子は恐怖であったろうことは容易に想像される。つまり，人を否定する大人という刺激と強い悲しみや恐怖との結びつきが古典的学習のプロセスによって学習され，教諭による否定的な言葉かけという類似した場面に遭遇した際に深い悲しみを引き出したのではないだろうか。そして，そうした状況を回避するために教諭とのかかわりを断つことで防衛しようとしたのではないかと考えられる。

就職活動時はどうであっただろうか，本来保育所の保育者は刺激としては中立的なものであり，自分を否定するという刺激にはならない。しかし，A の面談の中で明らかとなったのは，短大在学中に参加した実習において同僚や子どもの親の悪口を言う職員というものを観察学習したという事実である。悪口を言うということは，つまり人を否定的に捉えているということである。そうすると，A が感じた不安感は，就労先の保育者をイメージすることで人を否定的に捉える保育者のイメージとともに父親によって与えられた深い悲しみや恐怖の感情を呼び起こして

生じていると考えることが出来る。A は，手が震えて履歴書を書くことができなかったと報告しており，その恐怖は相当であったと推察される。そして，それだけの恐怖が生じているにも関わらず，どうしてそれが起きているのかがわからないという状態は，A が就職活動を止めてしまうのに十分な理由だったのではないだろうか。

### 2. 就労に繋がった面談の効果

A は 2 つの点で就労支援としての面談の効果があったと述べている。その理由を考えてみたい。

ひとつは，主観的に感じている辛さの理由がわかったことである。辛さというのはこれまでの考察で述べた深い悲しみや恐怖を主観的に体験することによる結果と考えられる。理由がわかったことによる A の心境の変化はなんであろうか。これには 2 つの理由が考えられる。重要な 1 つは，就職活動が停滞していた理由がわかり，その壁は過去のものだという理解である。先の考察で高校 2 年生の時の教諭の発言に対する A の行動は回避であるとした。そうであるならば，A の就職活動の停滞は，幼少期に父親の言動によって生じた深い悲しみと恐怖を再体験することを避けるための防衛行動であると考えられる。それと同時に，その感情は過去の事象に対する体験であり，現在起きている事象ではないと知ることで，現在の状況に対処することができるようになるのであろう。もう 1 つは，就職先での対人関係への不安は誰にでもあるとした姉の言葉に反論ができたことである。これは姉に直接言えたという意味ではない。A は家族の理解が欲しいかわからないとしながらも，実際には母親や姉の発言や態度を重く受け止めており，A の行動や思考に影響を与えていることが明らかである。A にとっての不安感は主観的なものであるため，客観的にどの程度のものかはわからない。もしかしたら，姉の言うとおりなのかもしれないとも考える。面談の中で出された宿題ができなかったときに，A は自分に呆れてしまうと言っており，誰にでもあるようなことを自分は乗り切れないのかと自責的に考えることは容易に想像される。であるならば，A の感情は誰にでもあることではなく，過去の逆境的体験に基づく極めて辛いものであると知ることは，自責的な感情を打ち消すのに十分であると考えられる。この点は，A の感じていることが手の震えとして母親の目に止まった時，家族もその状況を理解し就職活動が停滞していることへの理解を示したことからも支持されるだろう。

二つ目は，具体的な行動管理である。A の言葉からは，やらなければいけないことを理解していながら独りで進めることができないほどの状態に A はいたのだと解釈できる。だからこそ，A の状態を理解した上で不安や心配に返答してもらうことで安心し，やらなければと思っている行動が進んでいくことで自責感や自己否定感が減っていくのだと考えられる。

### 3. 保護要因の働き

本事例で見落としてはいけない重要な点は，加害者である父親以外の家族（母・姉・妹），高校からの友人C，Aを面談に導いた短期大学の友人といった肯定的な人間関係の存在である。これらの存在があるからこそAは複数の逆境的体験を経験しながらも人に対する信頼感を失わずに親しい対人関係を持ち，その対人関係によってライフイベントを乗り越えていくことができた。

## Ⅵ. 結　語

本事例は過去の逆境的体験の影響から就職活動が停滞していた。面談の結果と本人からの主観的評価からは，悲しみや恐怖の想起は解決されなくとも就労支援は可能であることが今回の事例にあたっては示唆された。必要なことは，過去の逆境体験による心理的な結果を本人が理解することであったと考えられる。学生の身近で支援を行う教員が保育者養成の経過中に生じるライフイベントに合わせて学生の行動に注意を払うと共に，逆境体験を受けた人の心の理解をすることが助けになるのではないかと思われる。

### 引用文献

内山伊知郎（2016）情動.（田島信元・岩立志津夫・長崎勤編）新・発達心理学ハンドブック，p. 449，福村出版.

（提出日　2018年9月28日）